

坪内逍遙の中国俗語趣味*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

<目次>

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. はじめに | 3.4 構造助詞・動詞重ね型 |
| 2. 研究資料と調査範囲 | 3.5 比況の「～と一般」・「一伍一什」 |
| 3. 坪内の作品に見られる中国俗語使用の諸相 | 3.6 「ほんとう」の「真個(箇)・真正・真成」 |
| 3.1 指示・疑問代名詞 | 3.7 その他 |
| 3.2 人称・呼称の語 | 4. おわりに |
| 3.3 話題転換語 | |

主題語: 坪内逍遙(Tsubouchi Syoyo)、唐話学(Chinese Study)、中国俗語(Chinese Slang)、漢字表記(Kanji Notation)、術学(Pedantry)

1. はじめに

本稿は、明治期に活躍した諸作家の作品に現われている漢字表記を通して、中国俗語使用の実態を把握し、当時の唐話学の状況をみるためのものである。近世には、流入した中国俗文学は日本人に歓迎され多くの人に読まれている。近代にも所謂唐話学の影響を受けていることを考察してみようとするもので、明治期の作家一人一人について全面的に考察されている研究は見られない。

筆者は、尾崎紅葉の作品には実に色々の中国俗語が用いられていることを考察したりことがある。尾崎は、中国俗文学に用いられている「這樣・那樣、這里・那里」のような「這～・那～」系列の指示代名詞の語や「甚麼・什麼」の疑問代名詞、「阿父・阿母・阿兄・大姐」のような呼称関係の語、「閑話休題」のような話題転換語、「明々地」のような構造助詞、他にも多用

* 本研究は韓国研究財団2018年度中堅研究支援事業(2018S1A5A2A01029485)の2次年度(219C000599)により作成された。

** 嶺南大学校 日語日文学科 教授

1) 羅工洙(2019.09)「尾崎紅葉の中国俗語趣味」『東北亜文化研究』第60集、東北アジア文化学会、pp.235-259

されていないが、種々の中国俗語が用いられていたことが明らかになった。他に、尾崎は中国俗文学をたくさん読んでいたことを自分の作品に書き残してもいる。

今回は、「明治期の諸作家に見られる中国俗語趣味の総合的研究」の二回目として、坪内逍遙の中国俗語趣味について考察したい。坪内逍遙(1859-1935)は、近代文学の作家として非常に有名であるので詳しく説明する必要まではないと思われるが、概略的に見ておくことにする。坪内は、「1859年に美濃国加茂郡で生れ、1876年に東京大学予備門に入る。1883年に東大の政治経済科を卒業後、東京専門学校講師。1885年に小説『当世書生気質』『小説神髓』を公刊。1891年に『早稲田文学』を創刊。1896年、早稲田中学の校長。1899年に文学博士の学位を取得。少時より劇を好み近松やシェークスピアに親しんだ。この他にも色々の著作を残している。1915年に早稲田大学教授を辞職。1935年没²⁾である。『日本人名大事典』の紹介には、唐話学と関連した内容が見られない。つまり、坪内が中国俗文学に関心を寄せたことについては全く言及がない。

ネット上の紹介には、「父から漢学書類を読まされた他に、母の影響を受け、11歳頃から貸本屋に通い読本・草双紙などの江戸戯作や俳諧、和歌に親しみ、ことに滝沢馬琴に心酔した³⁾」という内容がある。坪内が若い時に「漢学・読本」を読んでいたことや「曲亭馬琴」に心酔していたことには注目すべきである。大部分の明治期の作家は、たとえば夏目漱石や森鷗外など、英学の時代になってはいたものの、子供の時に漢学を修めていた。坪内は、漢学は勿論、曲亭馬琴や彼の作品である読本類にも関心を寄せていたことが伺われる。読本には多くの中国俗語が含まれていたので、坪内はそこから用字・用語を援用した可能性もある。今までに、先行研究のなかで坪内の唐話学の好みについて論じたものは見られないので、中国語の使用実態は把握されていない状態である。筆者は以前、「近代における唐話学の残影⁴⁾」という題で、明治期の諸作家の中国俗文学に対する関心について述べたことがある。そこで見た坪内に関する内容と以後追加された内容を提示してみると次の通りである。

『小説神髓』(明治18年、明文全16)

もろこし　ひとびと　せうせつ　ゆびさ　くわいんどうよく　ののし　きんべいばい　にく　ぶ　とんとう　ひやう
唐山の人々が小説を指して誨淫導欲と罵りたりしは金瓶梅もしくは肉蒲團等の評なるべく
わがくにうど　ものがたり　ひんせき
我國俗が物語を擯斥して~(p.24)

2) 平凡社の『日本人名大事典』(1990)の4巻からの要約である。pp.316-317

3) <https://www.wikiwand.com/ja/%E5%9D%AA%E5%86%85%E9%80%8D%E9%81%A5>

4) 羅工洙(2005.09)「近代における唐話学の残影」『日本語学研究』第13輯、韓国日本語学会、pp.43-63

然^{しか}り而^{しか}して金瓶梅肉蒲團ならびに猥褻^{きんぺいばい}なる情史^{じやうし}のごときは是^{これ}似^に而非^てなる小説^{せうせつ}なり(p.24)

源語水滸^{げんご}を見ても思ふべし(p.27)

馬琴翁^{ばきんおう}は源語平語^{げんご}太平記^{たいへいき}水滸西遊^{すいこうせいゆう}等の文^{ぶん}を折衷^{せつちゆう}して彼^{かの}一大機軸^{いちだいきじく}をいだせしなり(p.40)

曲亭^{きよくてい}の翁^{おきな}かつて小説^{せうせつ}の法則^{はふそく}を論^{ろん}じていへらく「唐山元明^{とうざんげんみん}の才子^{さいし}等^らが作れる稗史^{はいし}にはおのづか

ら法則^{はふそく}あり~省略^{しんずみ}金瑞^{きんずい}が水滸傳の評注^{すめい}には繡染^{きゆうせん}に作れり~略^{りやく}水滸傳には隱微^{いんび}多^{おほ}かり李贅^{りしきんずみ}金瑞^{きんずい}

等^らはいへばさらなり唐山^{もうこし}なる文才^{ぶんさい}子^しに水滸を弄^{もてあそ}ぶ者^{もの}多^{おほ}けれども評^{ひやう}し得^えて詳^{くわん}に隱微^{いんび}を發明^{はつめい}せ

しものなし云々」(pp.43-44)

又^{また}一部^{いぶ}の中に夥多^{うちあまた}の男本尊^{をほんぞん}を設^{まう}くる事^{こと}あり八犬傳^{はくでん}巡島記^{じゆんとうき}大内十杉傳^{だいないじゆんとうき}尼子九牛土傳^{でんあまこきやうし}竝^{しやう}に水滸傳

等^{とう}是^{これ}なり(p.54)

美少年録^{びせうねんろく}の主公^{しゆこう}の如^{ごと}きの金瓶梅の主公^{しゆこう}の如^{ごと}き皆^{みな}此例^{このれい}となるべきものなり(p.54)

『妹と背かぢみ』(坪内逍遙、明治18年12月、逍遙選集別冊1)。

自然活動^{しぜんくわつどう}の妙^{めう}をも見るなれ。水滸様^{すみこやう}の堅^{かた}くろしきを聞^{きき}て。(p.269)

なにがしが金瓶梅を評^{ひやう}するや。(p.355)

金瓶梅は猥褻^{わいせつ}の書^{しよ}なり。(p.355)

『近松の浄瑠璃』坪内逍遙、明治23年、逍遙選集8)

蓋^{おほ}し俗衆^{しやくしゆう}の知識^{ちしき}は、支那^{しな}の事蹟^{じしやく}は、『三国史』、『漢楚軍談』、『武王軍談』、『二十四孝』のたぐひの外^{ほか}にいでずして、(p.671)

『美辞論稿』(坪内逍遙、明治26年、逍遙撰集11)

『源氏物語』も『八犬伝』も『水滸傳』も『西遊記』も『三国志』も『太平記』も自笑^{しじやう}其蹟^{きしやく}が作^{つく}も〜(p.136)

「文のすがた」(坪内逍遙、明治27年5月、逍遙撰集11)

『莊子』の寓言^{うげん}の如^{ごと}き風論^{ふうろん}の一種^{いしゆ}なり。『西遊記』の如^{ごと}き、スペンサー『神女王』の如^{ごと}き、バンヤンの『天路歷程』の如^{ごと}きは、風論^{ふうろん}の巨篇^{きよへん}なり(p.529)

『めいどの飛脚』(坪内逍遙、明治24年12月、逍遙撰集8)

この義^ぎよりいへば『源氏物語』、『八犬伝』、『西遊記』等^ら、いづれも散文^{さんぶん}の叙事詩^{じよし}也。(p.736)

『内地雑居未来之夢』(坪内逍遙、明治19年3月、リプリント日本近代文学104)

試^{こころ}に孫呉空^{そんごくう}の奇術^{きじゆつ}にならひて。(p.165)

『妹と背かぢみ』(坪内逍遙 明治18年、明文全16)

自然活動^{しぜんくわつどう}の妙^{めう}をも見るなれ。水滸様^{すみこやう}の堅^{かた}くろしきを聞^{きき}て。(p.164)

『近松の浄瑠璃』(坪内逍遙、明治23年、逍遙選集8)

『源氏物語』、『八犬傳』、『西遊記』等、いづれも散文の叙事詩也。(p.668)

『桐一葉』(坪内逍遙、大正6年4月、『逍遙全集』1)

併し私の曲亭熱は「小説神髓」以後、全く冷却してしまつたので、自然と此歴史小説案をも棄ててしまつてゐたが、(p.181)

『桐一葉』(坪内逍遙、大正15年7月、『逍遙全集』1)

さればいゝな、夫美濃ノ守が口癖の話。諸葛孔明とやら、張良とやら、敵大勢寄せし時、櫓に登りて琴を弾き、門を開いておいたゆゑ、敵兵はあつけに取られ、智慧まけして逃げたとやら、(p.218)

「新楽劇論」(坪内逍遙、明治37年、『逍遙全集』3)

例へば支那劇の如きは、「西廂記」、「桃花扇」、「十二楼」などの昔は知らず、(p.507)

『アントニーとクレパトラ』(坪内逍遙、昭和2年5月、『逍遙全集』5)

アントニー対シーザーの人格的反照に項羽対漢の高祖、義仲対頼朝を連想し、ポムピー対三執政の軍艦上の折衝に鴻門の会を連想するの感興もまた決して浅少なりと謂ふべからず。

(p.706)

「脚本の朗読法」(坪内逍遙、大正9年4月、『逍遙全集』11)

試みに今日普通以上の教育を受けた者をして、曲亭らの稗史又は為永輩の戯作本の傍訓を払ひ、さて後一瞥下に朗読せしめよ。彼等の大概は、数行ならずして幾たびか誤読し、若しくは殆ど読下する能はざることあらん。(p.332)

曲亭風と手前勝手の手早合點して、氣短なる蘇生甚だ以て笑止の至りなり。(『梓神子』坪内逍遙、明治24年5月、逍遙選集8、p.154)1例。

滔々輕薄なる末法文人の中に、ひとり篁村居士といふ頼母しの優婆塞ありけるに、一曲でもなや曲亭穿鑿、馬琴に肩をいれる心のつらさ知らぬか。(『梓神子』坪内逍遙、明治24年5月、逍遙選集8、p.173)

馬琴を気取て、そは後回にときわくるを聞ねかし。(『一読三歎當世書生氣質』坪内逍遙、明治18年5月、逍遙選集別冊1、p.109)

稗史小説p.63。馬琴風p.97。(『一読三歎當世書生氣質』坪内逍遙、明治18年5月、逍遙選集別冊1)

馬琴の小説かにかなら、古事来歴がありさうな紋だ。(『一読三歎當世書生氣質』坪内逍遙、明治18年5月、逍遙選集別冊1、p.25)

……^{ば きん やつぶさ}馬琴の八房……(『未来之夢』坪内逍遙、明治19年4月、『逍遙全集』別冊1、p.678)1例。

目や口も馬琴の小説なら眼つぶらに〜(『所謂新しい女』坪内逍遙、明治45年3月、逍遙選集8、p.305)

坪内は、その多くの作品の中に中国俗文学の作品名を明記している。小説や評論に『水滸伝』『三国志』『西遊記』『金瓶梅』『肉蒲団』『西廂記』『桃花扇』『十二楼』『漢楚軍談』『武王軍談』のような中国俗文学の書名が出てくる。さらに、『桐一葉』には『三国志』の登場人物である「諸葛孔明・張良」が、『内地雜居未来之夢』には『西遊記』の「孫呉空」が、『アントニーとクレパトラ』には「アントニー対シーザー」の人格的対照に「項羽対漢の高祖」という図式で『漢楚軍談』の主人公「項羽・劉邦」が出てくる。坪内は、このように細かいところまで述べているので、中国俗文学の分野にも関心を寄せていたことが伺われる。

坪内はまた、読本の大家である曲亭の名前も提示しているし、彼の代表作である『八大傳』の書名も出している。また、徳田武によれば、坪内は「馬琴に心酔していた⁵⁾」という。『八大傳』の「第九輯下帙中卷第十九簡端贅言」には、中国俗語や中国俗文学の影響を考えさせる内容が見られる。そのキーワードを抽出すると、「拙文、唐山なる語さへ抄し載て〜^{からやま はいし からやま はいくわん すい こ せいゆう か な ぶみ からやま}唐山の稗史小説を〜唐山なる稗官小説の〜水滸・西遊などに〜仮名文に、唐山の俗語さへ〜⁶⁾」などがある。この内容から見て、曲亭馬琴は中国俗文学や中国俗語に関心を寄せていたと思われる。実際に、彼の作品には中国俗語が散見される⁷⁾。このような事情を考えると、坪内が中国俗文学のみならず、馬琴の作品からの用字・用語の影響を受けていたことも考えられる。しかし、ここでは「馬琴」の作品との影響関係までは述べないことにする。

5) 天保三年に刊行が始まった『開卷驚奇俠客傳』は、「続き出すを持つもの一日三秋の如し」(『近世物之本江戸作者部類』)と述べられているほど読者にその続刊を鶴首させていたが、馬琴の眼疾の悪化と出版書肆への不信を理由として、天保六年、第四輯を出したままで未完に終った。そのため尾張名古屋にあつて馬琴に心酔していた坪内雄蔵は、「其続きが見たくてたらず、知る筈のない大惣(筆者注:当時日本最大の貸本屋の略称)の番頭に質問を掛けたり、催促をして弱らせたことが何十度あつたか知れない」というほど熱烈にその後の筋の展開を知りたがつた(1987、「読本と近代小説」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、p.804による)。

6) 『南総里見八大傳』(岩波文庫の第7冊、pp.217-219)からの抽出である。

7) 鈴木丹士郎(1987)『読本の漢字』『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院、pp.235-237

羅工洙(2005.05)「馬琴作読本における中国俗語の話題転換語」『日語日文学研究』韓国日語日文学会、pp.97-120

本稿では、坪内の作品を通して、中国俗文学に用いられている語にはどのようなものがあるのかを見てみることにする。あくまでも個人的な用字・用語の問題ではあるが、明治期になっても唐話学の影響は少なくなかったことを述べていきたい。また、このテーマは明治期の諸作家にみられる中国俗語趣味の総合的研究であるので、研究の蓄積を活かし、他作家との比較を通して説明することにする。

2. 研究資料と調査範囲

坪内の作品を集めたものに、『逍遙選集』(全12巻・別冊5巻、第一書房、1977年)がある。「選集」となっているので、他にも作品があるように思われるのだが、以後「全集」の形で刊行されていない。筑摩書房の『明治文学全集16』には『坪内逍遙集』がある。『明治文学全集』に収録されている作品は大部分が『逍遙選集』にあるが、小説『発蒙攪眠清治湯講釈』は「選集」にない。また、『逍遙選集』には小説以外の種々の評論などがあるので、調査をする対象を限定する必要がある。

- 『桐一葉』坪内逍遙、大正15年7月、『逍遙全集』1)
- 『杳手島孤城落月』坪内逍遙、大正5年10月、『逍遙全集』1)
- 『役の行者』坪内逍遙、大正6年3月、『逍遙全集』1)
- 『役者と女魔』坪内逍遙、大正11年7月、『逍遙全集』1)
- 『法難』坪内逍遙、大正8年2月、『逍遙全集』1)
- 『牧の方』坪内逍遙、明治30年4月、『逍遙全集』2)
- 『靈驗』坪内逍遙、大正3年9月、『逍遙全集』2)
- 『新曲浦島』坪内逍遙、明治37年10月、『逍遙全集』3)
- 『新曲赫映姫』坪内逍遙、明治38年10月、『逍遙全集』3)
- 『長生新浦島』坪内逍遙、大正10年12月、『逍遙全集』3)
- 『テムペスト』坪内逍遙、大正4年2月、『逍遙全集』4)
- 『真夏の夜の夢』坪内逍遙、大正4年10月、『逍遙全集』4)
- 『ヘンリー四世』坪内逍遙、大正8年9月、『逍遙全集』4)
- 『じじや馬馴らし』坪内逍遙、大正9年11月、『逍遙全集』4)
- 『アントニーとクレパトラ』坪内逍遙、昭和2年5月、『逍遙全集』5)
- 『以尺報尺』坪内逍遙、大正7年7月、『逍遙全集』5)

- 『マクベス』坪内逍遙、大正5年3月、『逍遙全集』5
 『醒めたる女』坪内逍遙、大正4年10月、『逍遙全集』5
 『ウォーレン夫人の職業』坪内逍遙、大正2年3月、『逍遙全集』5
 『老圓紙幣の履歴ばなし』坪内逍遙、明治23年2月、逍遙選集8
 『をかし』坪内逍遙、明治23年8月、逍遙選集8
 『政界叢話』坪内逍遙、明治23年9月、逍遙選集8
 『梓神子』坪内逍遙、明治24年5月、逍遙選集8
 『女殺油地獄』坪内逍遙、明治23年、逍遙選集8
 『細君』坪内逍遙、明治22年1月、『逍遙全集』別冊1
 『京わらんべ』坪内逍遙、明治19年3月、逍遙選集別冊1
 『一読三歎當世書生氣質』坪内逍遙、明治18年5月、逍遙選集別冊1
 『妹と背かがみ』坪内逍遙、明治18年12月、逍遙選集別冊1
 『未来之夢』坪内逍遙、明治19年4月、『逍遙全集』別冊1
 『松のうち』坪内逍遙、明治21年1月、『逍遙全集』別冊1
 『開卷悲憤慨世士傳』坪内逍遙、明治18年2月、『逍遙全集』別冊2
 『賈貨つかひ』坪内逍遙、明治20年11月、『逍遙全集』別冊2
 『ふたごころ』坪内逍遙、明治25年8月、『逍遙全集』別冊2
 『此処やかしこ』坪内逍遙、明治29年、『逍遙選集』別冊4
 『春風情話』坪内逍遙、明治13年4月、『逍遙全集』別冊2→『明治初期翻譯文学選』雄松堂書店)→
 『日本文化全集』第22巻(日本評論社)にもある。
 『談撒奇談自由太刀餘波鋭鋒』坪内逍遙、明治17年5月、『明治初期翻譯文学選』雄松堂書店)→
 『日本文化全集』第22巻(日本評論社)にもある。
 『泰西活劇春窓綺話』坪内逍遙、明治17年1月、『逍遙全集』別冊2→『リプリント日本近代文学71、
 72』平凡社)→『日本文化全集』第22巻(日本評論社)にもある。
 『発蒙擲民清治湯講釈』坪内逍遙、明治18年6月、『明治文学全集16』筑摩書房)

その他、『明治翻譯文学全集《新聞雑誌編》』(大空社)や『続明治翻譯文学全集《翻譯家編》』(大空社)にも逍遙関係の著作があるが、「選集」などにあるものと重なるものもあり、ここでは除外することにする。

ここで資料としての問題に少々触れておくが、『泰西活劇春窓綺話』の訳者は、『東京新繁昌記』の著者であり、漢学に優れていた明治初期の文学者である服部誠一となっている。しかし、『リプリント日本近代文学72』の解説によれば、「元訳者は、坪内逍遙、高田早苗、天野為之であったことが、逍遙の「回憶漫談」と題して分担して翻訳、書肆に売り込んで二十

円を得たと回想される」⁸⁾と指摘している。このことを考えると、逍遙が関与していることが伺われる。また、『続明治翻訳文学全集《翻訳家編》』の坪内の年表をみると、明治13年の作品から載せているが、最初の作品の目録に『泰西活劇春窓綺話』が出ている(原本では明治17年となっている)。その次の作品が『春風情話』であり、坪内が21歳のときから翻訳を始めたことが分かる。筆者は以前、『泰西活劇春窓綺話』に見られる中国俗語⁹⁾を調べたことがある。当時は服部誠一に焦点を当てたが、本稿では坪内の俗語使用を知る補助資料として扱うことにする。

対象とする長編の作品は、上記のように多数である。提示した作品以外にも、必要に応じ他の短篇や評論文も参考にする。又、考察の方法としては、比較的多用されている俗語は深く考察し、用例の少ない低頻度の語は、用例のみを提示することにする。また、一貫性を維持するために、前稿の「尾崎紅葉の中国俗語趣味」の方式に倣い、「指示・疑問代名詞、人称・呼称、話題轉換語・構造助詞(地)、その他」の順に考察する。また、中国俗語であることを証明するために、唐話辞書である『俗語解』(近世、刊行年間未詳、吸古書院)などを基本的に用いることにする。

3. 坪内の作品に見られる中国俗語使用の諸相

3.1 指示・疑問代名詞

ここで言う中国語における指示・疑問代名詞は、伝統的な「此・彼・如何」のような漢字を伴う語よりも、「這・那・甚麼」系統の語を含む語をさす。勿論、明治期の諸作家は、基本的に「此・彼・如何」を使用していることは確かである。しかし、中国俗文学に関心を寄せていた作家は、暗暗裡に中国俗語を使用している。前稿の尾崎紅葉の例を見ると、「這樣・那樣・這箇・那箇・這麼・那麼・這裏・那裏・這回・這般・那邊・恁麼・什麼・甚麼」と「這・那・恁」が多用されていた。また、紅葉の特徴は、各語に多くの訓を当てていることである。たとえば、「這箇・那箇」の場合、^{こちら かかる こんな しやこ こツち これしき どツち どちら あちら あれだけ どツち か}「這箇・這箇・這箇・這箇・這箇・這箇・那箇・那箇・那箇・那箇・那一箇・

8) 「泰西活劇 春窓綺話解題」『リプリント日本近代文学72』平凡社

9) 羅工洙(2000.09)『『泰西活劇春窓綺話』における中国俗語的漢語表現』『日本語文学』第9輯、韓国日本語学会

那一箇・那個・那箇・那箇・那箇・那箇」のような例が見られる。人称・疑問代名詞をみる限り、尾崎は実にうまく中国俗語を利用していたことが伺われる。では、確認のため、近世の唐話辞書である『俗語解』から坪内の作品に用いられているいくつかの指示・疑問代名詞を提示してみよう。

那 晃曰彼ノ字其ノ字ノ心ナリ何レト用ル時ハ上声ニナルナリ。

那里 イカテカ又ハイツクナトト訳ス那里肯放ナトト云トキハイカデカナリ在那里ナトト使フト
キハイツクナリ里ノ字襪字ナリ裡ト類モ同シ音通ス。

那邊 イツク又ハカシコト訳ス。

那個 タレナルソ彼トモ云詞ナリ。

那人。那厮 アイツト云ホトノコト厮ハ少ノモノニシテ人ヲイヤシメル辞ナリアノ小者メカト云
ホトノコト。

這 此ト云字ナリ陶冕日本音言ナリ者ノ音ハ後世ノ俗音ナレトモ此ノ字ノ心ニ使フ寸ハ者ノ音ナ
リ。

這等 コレヲ。這般 コノヤウナ此タビ。這裡 ココ。這次 コノタヒ這一次同。這遭 同。

這樣 コノヤウナ。這個 同。這 ココ那里アソコ。

甚麼 一作什麼ニ類云由來ナリ。甚人 何人ナルヤ。

恁麼。恁 西廂註這等也。恁般。

『俗語解』には、他にも「這・那」系の語の紹介がある。では、坪内の場合はどういう語が用いられているのかを見てみよう。

知る這は小細工なるを(「テニソンの抒情詩及び物語歌」明治28年、『逍遙全集』11、p.436)

さて這の^{レベンスガード}「烏森」の古城といへるは-(『春風情話』p1) 這p.5、3例。這はp.90。

這は如何に^{い か}p.255。恁て^{かく}p.200、2例。(『一読三歎當世書生氣質』p.149)1例。

那の騒乱^{か さうらん}一千八百八十九年の乱の折りに際し、(『春風情話』p4)20例。那の方^{か かた}p.45。那人^{かのひと}p.49、

3例。争で^{いか}かp.97。

那^{かの}p.474、17例。那人^{かのひと}p.491、2例。那^{あの}p.484、5例。那^{かれ}p.480、4例。這は^こp.478。(『開卷悲憤慨世士傳』)

坪内が「這・那」を単独で用いる場合には、「這は・這は・這の・這・那の・那・那・那」の例が見られる。但し、ごく限られた作品にのみ見られ、「這・那」の漢字表記はあまり好まれていない。このような現象は、「這～・那～」系の語にも同様に見られる。

これら ことば エドガル もくぜん
 這等の言葉を「威童茹」は、默然として、(『春風情話』p.21)1例。

ただ これら がうぞく こうはいそんぼう
 但し這些の豪族の興廢存亡につきては、～(『春風情話』p.1)1例。

きみ あ かしこ やまでら
 君に逢ひまゐらすも那里の山寺にて～(『春風情話』p.21)1例。

たす こなた としほ まめやか かなた かしこ
 扶けて那方へ伴んといと忠実にものするを、(『春風情話』p.17)1例。那方p.62、3例。那處p.6
 6、2例。那所p.79。

われら かしこ はしり べつ ひと やと こ
 我等は那邊へ走ゆきて、別に人をば雇ひて来ん、(『春風情話』p.85)1例。

それそれ奥を聞くより口聞け、那邊に心がなほつた、(『女殺油地獄』p.717)1例。那邊p.720

ここのめうさう な へん さて いう が かん が
 ここの妙想は那邊にあるか、扱も優雅なり、閑雅なり、(『未来之夢』p.715)1例。

このげんいん な へん き なふはふ す あり か
 此原因は那邊にあるか、帰納法にて推理せん歟。(『一読三歎當世書生氣質』p.149)1例。

されど那邊よりか来つる船を駆る彼の物は「テニソンの抒情詩及び物語歌」明治28年、『逍遙全集』11、p.419)2例。(「如何なる人が最も善く笑ふか?」明治31年1月、逍遙選集8、p.387)2例。(「近世文学思想の源流」明治41年、逍遙選集8、p.640)

かへ かれら せいぎよ う くや ぶじよく うけ かのひと
 却りて那門が制御を受け。悔しき侮辱を受たまはん。(『開卷悲憤慨世士傳』p.526)2例。那人2
 例。那方1例。那奴2例。

そく
 即菩提なる酔ひ心地、恁麼の時ほそも何と(『一休禪師』明治41年6月、『逍遙全集』3、p.296)1例。

かく
 恁て(『一読三歎當世書生氣質』p.200)2例。

ゆくすゑ い か さだ ゼ ル マン カイ かいがらん
 久後什麼に定めなき、「日耳曼海」の海岸なる～(『春風情話』p.2)2例。

されど甚麼なる故にか、必ず泉の邊を離れず～(『春風情話』)2例。

上の例が、「這～・那～」系の語の全てである。近世・近代の資料を見た場合、普通は「這～」系の語が多用されているが、坪内の作品では「那～」系の語が優位を占めている。その例を

見ると、「^{これら}這等・^{これら}這些・^{かしこ}那里・^{かなた}那方・^{かしこ}那方・^{かしこ}那邊・^{かしこ}那邊・^{あしこ}那方・^{かやつ}那奴・^{かのひと}那人・^{どこ}那邊・^{なへん}那邊・^{かれら}那們・^{いんも}恁麼・^{いんも}恁麼」がある。このうち「那們」の「們」は、複数を表わすものであるが、「那們」そのものは元来「那麼」(あのような、あのように)の意味である。つまり、「かれら」のようにしてはいけな^{いんも}いのだが、日本的訓を付けている。「恁麼」は、指示や疑問の意味を兼ねていて、主に禅僧の間で用いられている語である。指示代名詞の場合、一見多様な様相を見せているように思われるのだが、使用頻度も低いし、使用範囲も狭い。つまり、低頻度で限られた作品にしか用いられていないのである。疑問代名詞の場合は「^{いか}什麼に・^{いか}甚麼なる」がある。これも『春風情話』にのみ見られる。「^{これら}這等・^{これら}這些」も『春風情話』にのみ用いられていることから、全般的に見て、彼の初期作品に「這〜・那〜・什麼・甚麼」が少々用いられていたことになる。坪内の初期作品である『泰西活劇春窓綺話』には「這ノ箇ノ・那ノ箇ノ・這般・這ノ般ノ・這裡・這ノ裡・那裡・那邊・怎麼ゾ」が見られるが、初期には援用していたものの次第に用いなくなる。

反面、尾崎紅葉の場合は実に多様な「這〜・那〜」系の語があり、「什麼・甚麼」も多用している面から見て、語の種類によって作家の好みが異なっていたことが分かる。しかし、量的に少ないとはいえども、坪内が中国俗語を用いていたことは確かである。

3.2 人称・呼称の語

人称や呼称を表わす中国俗語は実に多い。岡田袈裟男は、近世に中国俗文学を和訳した通俗和文(白話小説の翻訳)に見られる人称や人の呼び方¹⁰⁾、『水滸伝』類の唐話辞書¹¹⁾に見られる語を1例ずつ紹介している。その種類は多く、中国では人称や呼称の語が人によってうまく使い分けられていることが分かった。ここでは、坪内の作品に現われている語を中心に紹介するため、通俗和文に用いられていた語の紹介はしないことにする。尾崎の場合には、「良人・所夫・所天・阿父・阿爺・阿母・阿郎・阿兄・阿嬢・乃公・乃父・措大・朋友・各位・各自・足下・僮夫・姐・間諜・渠・支配人・自家・私窩子・東道・〜漢・大哥・渾身・小生・幫間」など様々

10) 岡田袈裟男(2006)「白話翻譯小説と人を表わすことば—江戸「通俗物」白話小説の人称語彙」『江戸異言語接触』(笠間書院)所収、pp.336-353

11) 岡田袈裟男(2006)「江戸の翻譯文体と人称の表現—唐話によって江戸の表現機構を見つめる—」『江戸の翻譯空間』(笠間書院)所収、pp.39-52

な俗語を使用しており、文脈に応じた和訓を付けている。

ではまず、多用されている「阿〜」系列の語から見てみよう。『俗語解』には、「阿伯 ヲヂ。阿叔 ヲヂ。阿兄 ^{ヒヨシ} アニ。阿弟 ヲトト。阿姉 ア子。阿妹 イモト。阿媽 ナイキ又母ノコトモ云。阿爺 ^{ヲヂサマ} ヲヤチドノ」と他に「阿家・阿翁・阿誰」も載っている。『雑字類編』(柴野栗山原撰、天明6年)には「阿父。大人。阿母。阿孃。大人」の例も見られる。

^{だれ} 阿誰が其やうな冤罪をいひかけましたか(『贖貨つかひ』p.717)1例。

^{おとつ} 阿父さんは卿の為には神も同様だ、其美しい容貌を造作へてくれた人だ。(『真夏の夜の夢』

p.193)5例。阿父さん?(『ウォーレン夫人の職業』p.828)1例。

^{まん} 萬一^{おとつ} 阿爺が必至に困窮して、^{ひつし} 食ふにも^{こんきゆう} 困るといふ場合となつたら、(『妹と背かがみ』p.333)1例。

^{しひ} 強て^{おんみ} 阿嬢を抑留せん。心のままに。」と(『開卷悲憤慨世士傳』p.540)2例。

二度目の^{どめ} 阿嬢を拵らへて来さうなれば、(『ふたごころ』p.805)2例。阿嬢p.853。

^{ひごと} 日毎の留守居も寂しからず、^{ととかか} 爺々阿母といふ片言を話相手に、(『ふたごころ』p.754)1例。

^{かか} 阿母(『美辞論稿』明治26年1月、『逍遙全集』11、p.20)1例。イイエ、^{おつか} 阿母さまに遇ひました。

(『細君』p.831)2例。

^{おかア} 阿母さま(『現代男』坪内逍遙、大正4年1月、『逍遙全集』2、p.686)1例。阿母さん(『ウォーレン夫

人の職業』)12例。阿母さん(『ウォーレン夫人の職業』)1例。(『骨董熱』)3例。阿母(『法難』p.717)

1例。(『名残の星月夜』)1例。阿母(『テムペスト』)5例。阿母(『名残の星月夜』)2例。阿母(『名残の

星月夜』)1例。(『テムペスト』)1例。(『ヘンリー四世』)1例。(『ウォーレン夫人の職業』)1例。(『ふ

たごころ』)1例。阿母さん(『じやじや馬馴らし』)3例。阿母(『骨董熱』)4例。阿母(『役の行者』)11

例。(『役者と女魔』)8例。

^{そな} 阿弟は兼て知れる如く。余回天の大志あり。(『開卷悲憤慨世士傳』p.465)7例。

^{おんみ} 阿兄が大志を聞くと雖も。(『開卷悲憤慨世士傳』p.466)10例。阿兄1例。阿兄3例。阿兄(『贖貨

つかひ』)12例。(『一読三歎當世書生氣質』)3例。阿兄(『此处やかしこ』)13例。阿兄(『贖貨つかひ』)

6例。阿兄^{あにうへ}(『贗貨つかひ』)1例。(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。阿兄^{おあにいさん}(『松のうち』)1例。阿兄^{あにき}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。(『此处やかしこ』)2例。阿兄^{ブラザア}(『一読三歎當世書生氣質』)2例。阿兄^{あなた}(『ふたごころ』)17例。

阿女^{そなた}はわたしに心置かず、叔母上^{こころお}の介抱^{をばうへ}専一^{かいほうせん}、(『ふたごころ』p.829)1例。阿女^{おこと}(『春風情話』)8例。

細君の氣転酒など一口といふ所なれど阿郎^{あなた}は飲けぬ口、(『此处やかしこ』p.318)2例。阿娘^{おこと}(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。阿娘^{おんみ}(『開卷悲憤慨世士傳』)13例。

日毎^{ひごと}の留守居^{るすゐ}も寂しからず、爺々^{ととかか}阿母^{かたこと}といふ片言^{はなしあひて}を話相手に、(『ふたごころ』p.754)1例。

坪内は、「阿～」系の語を多様に用いていることが分かる。「阿～」には、「阿誰^{だれ}・阿父^{おとつ}さん・阿爺^{おとつさん}・阿嬢^{おんみ}・阿嬢^{おつかん}・阿嬢^{あなた}・阿母^{かか}・阿母^{おつか}さま・阿母^{おつか}さん・阿母^{おかア}さま・阿母^{おかあ}さん・阿母^{おつかア}・阿母^{おつかあ}・阿母^{かつかア}・阿母^{おふくろ}・阿母^{おふくろ}さん・阿母^{あのひと}・阿母^{おんも}・阿弟^{そなた}・阿兄^{あけい}・阿兄^{おんみ}・阿兄^{いろね}・阿兄^{あにうへ}・阿兄^{にいさん}・阿兄^{にいさむ}・阿兄^{あに}・阿兄^{おあにいさん}・阿兄^{あにき}・阿兄^{ブラザア}・阿女^{あなた}・阿女^{そなた}・阿郎^{おこと}・阿娘^{あなた}・阿娘^{おんみ}が見られる。さらに「父」の意味である「爺々^{とと}」が孤例見られる。ここでは「阿母・阿兄」の例が多く、文章に合わせた種々の訓を付けることにより、自在に俗語の漢字表記をしている。また、特異な点は、「阿兄」に「あけい・ブラザア」と音読みと外来語の振り仮名を付けて、読者をしてかなり首を傾げさせるような読みもしている点である。全体的に見て、「阿母・阿兄」は多用している反面、他の「阿～」系の語は少数であり多様であった。『泰西活劇春窓綺話』には、「阿爺・阿兄・阿嬢」の例が見られる。

一人称や二人称・三人称として、「儂^お・你^き・渠^か」も見られる。

イヤ左^さにあらず、渠^{かれ}今^{いま}少^{すこ}しく肥満^{ひまん}ならばお身^みが申^{まう}す所^{ところ}、(『自由太刀餘波鋭鋒』p.28)1例

渠^かは魚洗^{いさ}にてありしを太閤取立^{たいこうとくだち}られ、(『沓手島孤城落月』p.480)1例。

你^{そなた}は今尚^{いまなほ}記^{おぼ}えてか。(『開卷悲憤慨世士傳』p.567)3例。

お兄^{あに}さまがお帰^{かへ}りなされて、儂^おの勢^{いきほ}ひが落^おちようと、人望^{じんぼう}が無^なくならうと、(『ふたごころ』p.799)49例。

特に、『ふたごころ』に「儂」が集中的に用いられている点が特異である。『雅俗漢語訳解』(明治11年)には「儂 ワレ 呉俗ノコトバ。儂家 女子自称ノ語、奴家ト云ヒ妾ト云ニ等シ」とある。『俗語解』には「^{ニイモン}你們 汝等也」、『助語審象』(三宅橘園、文化14年)には「^{キヨ}渠 カレ。渠ハ彼ヲ輕ンシテコレ程ノ者トコナシテ言フナリ」などの例が見られる。近代の文学作品には「儂・你・渠」¹²⁾が比較的多く用いられているが、坪内はあまり好んでいない。「おっと」を表わす「所天・良人」も見られる。

^をと^{たの}頼む^{こひびと}情人の。御運^ご開^{うん}けん^{ひら}端緒^{いとぐち}をば。(『開卷悲憤慨世士傳』p.575)1例。(『じやじや馬馴らし』p.679)1例。

あなたは舍弟^{おとうとご}の細君^{おくさま}ですから^う所天^ちにや私^{わたし}におツしやるよりもー(『此処やかしこ』p.335)2例。

わしにもわしの^{つれあひ}所天^{あくていもくいてい}になる人にも、あいつ悪口雜言吐くでござります。(『靈驗』p.673)1例。
(『役の行者』p.510)1例。

枕席^{ちんせき}を進むるを努^{すす}となし、其^{その}所夫^{もつと}を扶^{たす}け助^{たす}けて、(『妹と背かがみ』p.342)1例。(『此処やかしこ』)1例。^う所夫^{ちの}(『此処やかしこ』)1例。

誠^{まこと}に親切^{しんせつ}にて「^{よきひと}良人」なり。(『妹と背かがみ』p.403)1例。

あの人は好^すいたらしい人ではあるが、^{もつと}良人^ととするだけの価値はない。(『醒めたる女』p.614)1例。

「所天・良人」も普通の読者としては少々難解の語であるが、基本的には「おっと」の意味として用いられるものである。「所夫」は「所天」の意味として用いられている。『雑字類編』(柴野栗山原撰、天明6年)には、「^{ヲツト}夫。夫婿。夫主。良人。所天。夫子。夫君」とある。これも、尾崎紅葉をはじめ、近代の文学作品によく用いられているものの一つである¹³⁾。

「あに・あね」を表わすものに、「哥・姐」がある。大部分は「大哥・大姐・姐姐・小姐」の形で用いられている¹⁴⁾。

12) 羅工洙(2018.12)「近世・近代における中国語の人称代名詞「儂(咱)・渠」の受容と展開」『比較日本学』第44輯、漢陽大学国際比較研究所

13) 羅工洙(2016.02)「近世・近代に於ける「所天・良人」について」『日本近代学研究会』第51輯、韓国日本近代学会

エ。^{ねえさん}大姐。^{なん}何ですとエ。(『一読三歎當世書生氣質』p.16)3例。^{あねえ}大姐1例。^{ねえ}姐さん9例。(『老圓紙幣の履歴ばなし』)1例。

坪内の作品には「哥」の例はなく、「姐・大姐」が少々用いられている。『泰西活劇春窓綺話』には「小姐」の例が多数ある。『兩國譯通』(刊行年間未詳)には、^{タアアチイ}大姐(アネ)・^{タアコウ}大哥(オホアニ)とある。

^{やうや}漸く^い以前の^{ぜん}兵士^{つはものばら}門。^{たいまつ}炬火あまたふり^{てら}照して。(『開卷悲憤慨世士傳』p.520)1例。

^{かへ}却りて^{かれら}那們^{せいぎよ}が^う制御^{くや}を受け。悔^{ふじよく}しき侮辱^{うけ}を受たまはん。(『開卷悲憤慨世士傳』p.526)2例。

『開卷悲憤慨世士傳』には、複数を表わす漢字表記として「們」を用いている。近代文学作品には多用されている¹⁵⁾方だし、尾崎の場合は「我門」の例があった。『劇語審譯』(幕末伝来本)には「們・等也・俺們」の例があり、「等」の意味であることが分かる。「們」は基本的に「我・你・他」の人称に付ける。また、呼称に付けることもたまにあるが、指示詞に付けることはない。そういうわけで^{かれら}「那們」の例は和化したものといえよう。

他にも、人称・呼称と関係する語を『一読三歎當世書生氣質』から抽出してみよう。

^{そつつか}足下1例。^{そこ}足下2例。^{たいこもち}幫間3例。^{もり}幫間1例。^{ともだち}朋友1例。^{ほういう}朋友2例。^{フレンド}朋友1例。^{おとつさん}家大人4例。^{こども}兒子1例。^{いいひと}情人5例。^{いろ}情人1例。^{みるひと}看客4例。^{みるひと}看官3例。^{れいぢやう}令嬢2例。^{むすめご}令嬢2例。^{シスタア}令妹1例。^{ガール}小娘1例。^{ブラザア}小弟1例。^{おのれ}自家1例。^{じか}自家1例。^{いいひと}情夫2例。^{ちちい}老爺1例。^{おとつさま}家尊君1例。^{せうし}小子1例。

色々の作品を見ると、上のような例以外にも音訓を多様にした、^{わたくし}「小生」・^{せうじん}「小人」・^{わたくし}「小官」・^{おれ}乃公・^{おとうさま}家尊君・^{おとうさま}家尊・^{あるじ}東道・^{てんでん}各自・^{さいし}妻子・^{かぞ}家尊父母・^{いろ}番頭・^{ばんとう}令弟・^{れいいてい}令閨・^{さいくん}各位・^{かたがた}主人公・^{しゅじんこう}主公・^{あるじ}主公。

14) 羅工洙(2016.08)「近世・近代における中国語の「~哥~姐」の受容と展開」『日本近代学研究』第53輯、韓国日本近代学会

15) 羅工洙(2013.03)「近世・近代における複数を表わす中国語「~們」について」『日本語文学』第56輯、韓国日本語文学会

ごろつき ^{みなかもの} 破落戸・^{かうれい} 僇夫・^{ますらを} 伧儷・^{ますら} 壮夫・^{ぢやうやうぶ} 大丈夫・^{いいひと} 女丈夫・^と 情人・^{わかの} 相公・^{だんな} 官人・^{わかの} 郎君」などが用いられている。

又、^{ゑひどれ}「酔漢」のような「〜漢」も多用されている。坪内は、このように多様な人稱・呼称の中国俗語を用いていたことが分かった。

3.3 話題転換語

話題転換語とは、ある話の内容から他の内容に変えるときに用いる語で、「さて・ところで・さるほどに」のようなものである。和語に「偕」のような漢字を表記するが、中国俗文学で用いられている語が日本文学に援用される例が多い。話題転換語が多く取上げられている辞書としては、『水滸伝字彙外集』(写本、未詳、『唐話辞書類集』13巻)がある。「水滸讀格」という項目に種々の語を載せている。その解釈を除き例を示すと、「話説・却説・且説・再説・只説・不説・当下・当時・不在話下・話分両頭・閑話休題・閑話少説・話休絮繁・話不絮繁・不題話休絮繁・按下不題・閑過不題・放下一頭却説・話中不説・休説・却説・畢竟・正是・且聽下面分解・且把閑話提過只説正話」のように、実に多様な話題転換語が見られる。坪内がどのような話題転換語を用いているのかを見てみよう。形態が異なるものは全て提示しておく。

サアサア^こ小町田、^{かん わ きうだい}閑話休題だ。^{かへつとく}却説をはじめたまへ。(『一読三歎當世書生気質』p.64)1例。

^{あだしごとにはさておき}閑話休題、^{かん わ きうだい}さても1例。^{かくて}閑話休題。却説(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。^{あだしごとにはさておき}閑話休題(『開卷悲憤慨世士傳』)2例。(『春風情話』)2例。^{あだしごとにはさておき}閑話休題(『春風情話』)1例。

^{あだしごとにはさておき}閑話休題。^{ほど い ぜん わらべ}さる程に以前の童子に。(『開卷悲憤慨世士傳』p.473)4例。^{かん わ きうだい}閑話休題。さる程に(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。

^{かへつとく}却説其翌朝^{そのよ}六月二十日。(『一読三歎當世書生気質』p.71)2例。(『春風情話』)1例。(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。^{かくて}却説(『開卷悲憤慨世士傳』)3例。^{さるほどに}却説(『開卷悲憤慨世士傳』)1例。^{さても}却説(『此処やかかしこ』)1例。(『開卷悲憤慨世士傳』)2例。

^{このくに}日本の人は三千六^{そのとき}當下^{ちやい}おぼろ老爺は乗地になりて、(『発蒙攪眠清治湯講釈』p.251)1例。(『天の網島』)1例。

^{それはさておきここにまた}案下某生再説^{じやうしゆ}前の城主「阿蘭烏森」は一度^{アルランペンストカード}〜(『春風情話』p.9)1例。

それ は さておき こう ら り えん じ
案下復説。鴻阿莉筵兒は。(『開卷悲憤慨世士傳』p.476)1例。

はなしふたつにわかる あ ど り やん このとしごろ ひさ ろう ま みやこ はな
話頭両分。重度利安は此年比。久しく羅馬の都を離れて。(『開卷悲憤慨世士傳』p.501)1例。

はなしふたつにわかる ほど
話頭両分。さる程に1例。

あだしごとにはさておく り えん じ い わがそありちか せつくわう は な し いっぺん
空話休題。莉筵兒は。ややありて我傍近く説光を。(『開卷悲憤慨世士傳』p.561)1例。/話頭一転
 して1例。

ときつことはさておく ル シイ ア シュトン え し をとこ たす
再説休題「瑠紫、阿朱遁」は得知らぬ男に扶けられて、(『春風情話』p.78)1例。

そのとき ル シイ ア シュトン また お の れ こころ かへ
登時「瑠紫、阿朱遁」は全く自己の心に復り、(『春風情話』p.98)1例。

坪内が多様で独特な話題轉換語を用いていることが分かる。その種類としては、「閑話休題・却説・當下・案下某生再説・案下復説・話頭両分・空話休題・再説休題・登時」に各々の訓を付けている一方、音読みは「閑話休題」のみである。この中には「水滸讀格」にない「案下某生再説・案下復説・話頭両分・空話休題・再説休題」もある。これらは『漢語大詞典』にも見られないので、中国語的表現をまねて作られた漢字表記である可能性がある。このような現象は、明治期の他の作家にも少々見られる¹⁶⁾。尾崎紅葉の場合も「不在話下却説・話次分頭・
 閑話休題・案下却説・話下不在」のような独特な表記をしていたが、坪内とは趣を異にしている。もう一つの特徴は、話題轉換語そのものがかなり難解の語であったためか、『此处やかしこ』を除いて、坪内の初期作品(『春風情話』『開卷悲憤慨世士傳』『一読三歎當世書生氣質』『癡蒙攪眠清治湯講釈』)に集中していることである。『泰西活劇春窓綺話』には、「話説ス・却テ説ク・話両頭二分ル・話両頭二分ル却テ説ク・閑話休題」が用いられている。「水滸讀格」には「且聴下面分解」の例があるが、これは小説の最後に用いられる所謂「章回小説」の常套句である。この常套句をまねた形も少々見られる。

看宜請フ下回ニ細説スルヲ看テ知ルベシ(『泰西活劇春窓綺話』第10回)

ひつきやうくだん ふ た り もの このがくかう しよせい りやうにん きた のち はた なんら
 畢竟件の二人の者は、此学校の書生なるや、はた兩人が来りし後、果して何等の、はなしがある。
 のちのち くだり ととき
 後々の回は説いづべし。(『一読三歎當世書生氣質』p.25)

16) 羅工洙(2008.12)「近世・近代における話題轉換語の諸相」『東北亜文化研究』第17輯、東北亜細亜文化学会、pp.357-382

確かに、坪内の初期の作品に集中してはいるが、中国俗語的話題轉換語をうまく活用していたことが分かった。

3.4 構造助詞・動詞重ね型

香坂順一は、「一音節(あるいは語素)に構造助詞‘地’(?)をつけ、副詞をつくる傾向は宋代以前の資料にもみられる」¹⁷⁾とし「敦煌変文」の例を挙げ、続いて、中国俗文学に用いられていることを説明している。『俗語解』には、^{テリイ}「地 陶甕曰総シテ俗語ニ地ノ字ヲ使フコト底ヨリ^{テリイ}地ヘ転シ地ヨリ的ヘ転シタルモノナリ底地的三字一義ナリト又曰地字付字也何々地ト云コトハ数モ限りモナク有コトナリ廣ク小説ヲシレハ知コトナリ態字ノ下ニ使フ字ナリ」とあり、「～地」は、一種の接尾辞として中国俗文学で多用されている。尾崎の場合は、^{ましぐら}「^{ましぐら}慕地に・^{あからさま}白地に・^{あからさま}明々地に」を用いている。

其外貌に眩されて、^{たちどころ}立地に之を察すること能はざれど、(『春風情話』p.26)1例。(『自由太刀餘波鋭鋒』)1例。(『開卷悲憤慨世士傳』)6例。(『未来之夢』)1例。(『政界叢話』)1例。(『読法を興さんとする趣意』坪内逍遥、明治24年4月、『逍遥全集』11、p.251)1例。(『新曲浦島』)1例。(『名残の星月夜』)1例。(『法難』)1例。(『桐一葉』)1例。

大鹿は^{たちまち}忽地後足躓たふされて、地上へへ(『春風情話』p.49)3例。(『自由太刀餘波鋭鋒』)5例。(『開卷悲憤慨世士傳』)49例。(『発蒙攪眠清治湯講釈』)1例。(『未来之夢』)6例。(『此処やかしこ』)1例。

その勢恰も烈風の如く、^{ましぐら}慕地に追かけ来りてへ(『春風情話』p.80)1例。(『自由太刀餘波鋭鋒』)2例。(『開卷悲憤慨世士傳』)2例。(『文明の研究』坪内逍遥、明治37年、逍遥選集8、p.410)1例。(『近世文学思想の源流』p.577)1例。(『役の行者』)1例。^{ましぐら}慕地に(『マクベス』)1例。

彼^{たちまち}乍地に今迄の、正しき心を豹變なし、(『自由太刀餘波鋭鋒』p.54)3例。(『未来之夢』)2例。

互の胸は^{あからさま}白地に。また明さねども相思ふ。(『開卷悲憤慨世士傳』p.542)1例

相面接して^{あからさま}明々地に。敢て彼奴が憤怒を買はん。(『開卷悲憤慨世士傳』p.549)3例

17) 香坂順一(1983)『白話語彙の研究』光生館、p.310

これもいくつかの作品を除き、坪内の初期作品に集中している。用いられている語には、^{たちどころ}「立地に」^{たちまち}「忽地に」^{たちまち}「乍地に」^{まつぐら}「驀地に」^{あからさま}「白地に」^{あからさま}「明々地に」がある。尾崎と共通している語は「白地・明々地・驀地」である。「乍地」は、管見では坪内以外の作品には見られない独特のものである。しかし、『漢語大詞典』によれば「元 戴善夫《紫云庭》第四折」の例があるので、和化したものとはいえない。ともあれ、尾崎よりは多種で多用していることがわかった。次は、同じ動詞が重なった形の「動詞重ね型」についてであるが、まず唐話辞書の説明を見よう。

審一審トハ。^{ヒト}一キンミ。スルト。云コト也。看一看。想一想ノ類ノ如キ。一ノ字ヲ。中ニ ^{ハチミ}夾タル句法。俗話ニ甚 ^{ハナハダ}多シ(『字海便覧』(享保10年))

一 一ノ字句ノ中間ニ有時ハチヨツトト云意ナルナリ譬ハ看一看トハチヨツト見ヨト云コト等一
等トハチヨツトマテト云コト走一走トハチヨツト行ケト云コト他此心ニテ理會スヘシ予按スル
ニ中略 推一 推トハチヨツトラシテ見ヨト云コトナリ凡 ^{ハチミ}二字疊テ三字ヲ入タル皆此心ナリ(『俗
語解』)

動詞重ね型を中国語学では普通「V—V」と表わしているが、同じ動作性漢字の間に漢数字「一」が挟まっている語である。この形式が縮まると「VV」形式になる。当然、伝統的な日本の漢語にはないものであり、基本的な意味は「ちょっと～する」である。日本の近世や近代の文学に少々用いられているし、これを訳した形、たとえば「一走り走る」のような形は多用されていた¹⁸⁾。

このあしついで ^{ちよど}適一 ^{ゆき}適て。該書を借得て来ん程に。(『開卷悲憤慨世士傳』p.471)1例。

いちびと ^み市人ばらをば見返りながら。 ^{うしわぶき}咳一咳 ^{さて}つつ偕いふやう。『開卷悲憤慨世士傳』p.555)1例。咳一咳
して2例。

をり ^{ぜんだん}折しも前段に ^{ちよつとのべ}術一術 ^{げんくわんにん}たる、頭官某の君よりして、(『妹と背かがみ』p.404)1例。

むし ^{かぜ}寧ろ兼てより心得たるが如く、 ^{ちよつとみ}瞥一瞥 ^{くちず}たばかりで誦さみしが、(『妹と背かがみ』p.414)1例。

18) 羅工洙(2002.06)「近世・近代における中国俗話『動詞重ね型』の受容」『日本学報』第51輯、韓国日本学会、pp.27-46

いま ^{ちよつとみ} 看^{てがみ} 看たりし手紙といひ、(『未来之夢』p.600)1例

はな ^{ちよつとみ} 離れて ^{ちぢみち} 瞥^に 瞥れば縮底に似たれど、(『未来之夢』p.664)1例。

ねが ^{このいへ} 願ふは此亭に入りて ^{ちよつとやす} 憩^い 憩まん。(『をかし』p.75)1例。

そ ^{こくじん} 蘇国人もおなじ ^{よく} 欲はありながら、^{ひとくふ} 考^か 考していふ、^{むだ} 買ふのは贅なり。(『をかし』p.80)1例。

(シヤロウに) ^つ 突^つ 突いといて ^{くだ} 下さい。(『ヘンリー四世』p.575)9例。

坪内の作品には、「^{ちよど} 適^{ゆき} 適て・^{うちしわぶき} 咳^{がいいちが} 咳つつ・^{ちよつとのべ} 咳^{ちよつとみ} 咳して・^{ちよつとみ} 術^{ちよつとみ} 術たる・^{ちよつとみ} 瞥^{ちよつとみ} 瞥た・^{ちよつとみ} 看^{ちよつとみ} 看たりし・^{ちよつとやす} 憩^{ひとくふ} 憩まん・^つ 考^つ 考して・^つ 突^つ 突いといて」が見られる。音読みは「^{がいいちが} 咳^{がいいちが} 咳」のみで、「ちよつとゝする」系の和訓をしている。中国俗文学で用いられている「V―V」形式をそのまま生かしている。尾崎紅葉の場合は動詞重ね型は全くなく、作家による好みが見られる。

3.5 比況の「～と一般」・「一伍一什」

比況を表わす指標として「如・像・似」などがあるが、少々異様のものに「～と一般」がある。『小説字彙』(寛政3年)には「一般 オナジ」とあり、前件と後件は同様であることを意味している。面白いことに、比況を表わすとき、中国俗文学では「如～一般・似～一般・像～一般・與～一般」のように「如・似・像・與」と共に用いられている。これが、近世や近代の日本文学では「～ト一般」が主たる形式となっているのだが、「與～一般」からきたものといえる¹⁹⁾。坪内の作品には以下のようなものがある。

^{あたか} 恰も^{ひといき} 一息^{たはごと} ぼしかつたと ^{いつばんなり} 譏語^い ぬかすと一般也。(『梓神子』p.153)1例。(「近世文学思想の源流」)1例。(「竹取」について)1例。(「明治の舞踊」)1例。

陳々腐々、^へ 譬^へ ば造り花と一般、技巧の末にのみ全力を〜(『近世文学思想の源流』坪内逍遙、明治41年、逍遙選集8、p.592)1例。

例へば、當用のよく整ふやうに書ける手紙の文言と一般にて、実用には足れど、(「読書法を説きて国文研究者に望む」明治27年12月、『逍遙全集』11、p.277)1例。

19) 羅工洙(2013.06)「近世・近代における比況を表わす『～と一般』について」『日本語文学』第57輯、韓国日本語学会、pp.41-74

丁度我が足利氏の末戦国時代と一般である。(「近世文学思想の源流」明治41年、逍遙選集8、p.571)1例。

そのほかいろいろ ほんそう や み よ てつぼう ばん がう あて そろゆゑ
其外色々 と奔走すれども、暗夜の鉄砲と一般。毫も的になく候故に、(『一読三歎當世書生氣質』p.87)5例。

(『開卷悲憤慨世士傳』p.492)1例。(『発蒙攪眠清治湯講釈』)1例。(『妹と背かがみ』)3例。(『京わらんべ』)1例。(「人生四季」)1例。(『馬骨人言』)2例。(「新楽劇論」)1例。(「国民楽の将来」)1例。(「能楽の将来につきて」)1例。(『墮天女』)1例。(『所謂新しい女』)1例。(「舞台上の色彩と舞踊劇」)1例。

坪内における比況を表わす「〜と一般」は、主に評論文に現われているのが特徴である。比喩・例示の意味で用いられている。普通は「如し・様だ・みたいだ」がその役割をしているので「〜と一般」は少数の例であるが、中国俗語であることはたしかである。尾崎も使用しているが、坪内ほどではない。

次に、「いちぶしじゅう」を漢字で表わすときには「一部始終」と書くのが一般的である。しかし、近世・近代には目に慣れていない漢字表記が見られる。

こんぐわい ひ めい さい ご いち ぶ し じゅう くは きろく かきと
今回の非命の最後の有枝有葉、悉しく記録に書留め、(『自由太刀餘波鋭鋒』p.167)1例。

り し ぐち いちだいじ いち ぶ し じふ ききえ
莉氏の口より一大事の。有枝有葉を聞得しのみか。(『開卷悲憤慨世士傳』p.577)2例。

この ひ いち ぶ し じゅう つげ ききをは
此日の一十五十を告るがままに、聞了り、(『春風情話』p.26)1例。

いち ぶ し じゅう き まんぞく ひつでう
一伍一什を聞かれなば、満足あるは必定なり、(『自由太刀餘波鋭鋒』p.142)2例。(『一読三歎當世書生氣質』)2例。(『妹と背かがみ』)5例。(『京わらんべ』)1例。(『未来之夢』)3例。(『賈貨つかひ』)3例。(『細君』)1例。(『ふたごころ』)10例。

「有枝有葉」は、近世の読本以外では今のところ、宮崎夢柳の『自由の凱歌』(明治15年)にしか見られない非常に独特な表現である。しかし、『小説字彙』には「有枝有葉的細説 イチブシジウクハシクハナス」とあり、中国俗文学で用いられている語であつた。また、中国俗文学では、主に「一五一十」が一般的に用いられている。逍遙の作品にも見られるが、普通は「一伍一什」を用いている。中国では「一伍一什」が用いられていないことから、日本には近代に形を変えて用いていたものも多数あつたことが窺える。尾崎紅葉の場合は、「一伍一

什」をはじめ「自一至十」を用いている。「一より十に至るまで」の「一部始終」を日本的にしたものである²⁰⁾。この場合は、坪内の方が中国俗語に近い語を用いている。

3.6 「ほんとう」の「真個(箇)・真正・真成」

比較的に多用されているし、特徴のあるものの最後の例として、「ほんとう・まこと」を表わす語である「真個・真正・真成・真実」について見てみよう。「本当・本統」の漢字表記は意外と新しく用いられるようになったためか、近世の資料には現在のところ見られない。明治期になっても初期の作品には殆んど見られない。その代りに「真・真実・実」または「信実・寔」などの表記をしている。他にも色々あるが、後で「ほんとう」の語誌について考察したい。「真個・真正・真成・真実」のうち「真実・真正」は目に慣れているが、「真個・真成・真誠」は少々違和感のある語である。「真個」は『語録字義』(元禄7年)に「真箇 眞實ナリ」とあり、近世や近代の文学作品に多用されていた²¹⁾。『雅俗漢語譯解』(明治11年)には「眞正 マコトニ ホン
ホンニ 眞個^コ 上ニ同 眞材^{サイ} 上ニ同、『詩語解』には「真成 眞成浪出遊^{ニ ス} 眞成薄命^{ニ ナルカト ク ス} 久尋思與
ニ今俗語眞正^ノ 同成或與^{ノチンチン} 誠通世本古義忠^シ 君親^ハ 上^ス 發^{ニシ} 于^{ニム} 眞誠^{ラス}」とある。日本の
古辞書である『饅頭屋本節用集』に「眞讀^{シンドク} 眞相^{サウ} 眞偽^ギ 眞箇^コ 眞實^{ジツ}」とあるので、「真個・真正」
は中世以後に受入れられたものである。『日本国語大辞典』によれば「真実」は早い時期に受容されたもので、「ほんとうに」の意味は中世からである。また、同辞書は、「真成」は近世、「真誠」は明治期の例を載せている。『漢語大詞典』によれば、「真成・真誠」は中国で唐代以後の詩や小説に用いられている新しい語である。では、坪内の例はどうだろうか。なお「真実」は日本に早い時期に導入されたので、ここでは省略する。

そのもの 眞^まこと^{こと} これ^{これ} にく^{にく} なほあま^{なほあま}
其者こそは眞個^{まこと}に^{これ}是。悪みてても尚餘りあれども。(『開卷悲憤慨世士傳』p.486)1例。

ジョーンさん、わたし眞個^{ほんたう}に^{あき}呆れましたよ。(『醒めたる女』p.643)1例。

20) 羅工洙(2013.06)「近世・近代における中国俗語『一五一十・一伍一什』」『国語学研究』第43集、東北大学国語学研究刊行会、pp.25-35

21) 羅工洙(2002.05)「近代における中国俗語の受容―『真個』を例として―」『日語日文学研究』第41輯、韓国日語日文学会、pp.99-121

^{ほんとう}
真個に(『松のうち』p.732)2例。(『此処やかかしこ』p.364)3例。(『醒めたる女』)1例。(『マクベス』)
 1例。^{ほんたう}**真箇**に(『松のうち』)4例。^{ほんとう}**真個**に(『此処やかかしこ』)5例。^{ほんとう}**真箇**に(『ウォーレン夫人の職業』)
 9例。^{ほんたう}**真箇**に(『ウォーレン夫人の職業』)1例。**真個**(『英詩文訓釈』)1例。
^{これしんせい} ^{じ ゆう あい} ^{じ ち どりつ} ^{かつぼう}
 是**真成**の自由を愛し、自治独立を渴望せる。(『開卷悲憤慨世士傳』p.650)1例。(『妹と背かがみ』)
 1例。
 オホ、、、^{ほんたう}**真成**にさうですよ。(『一読三歎當世書生氣質』p.13)5例。(『妹と背かがみ』)5例。
 (『發蒙攪眠清治湯講釈』)4例。^{ほんたう}**真成**の(『妹と背かがみ』)2例。(『賈貨つかひ』)2例。^{ほんたう}**真成**の(に)
 (『此処やかかしこ』)4例。^{ほんとう}**真成**に(『此処やかかしこ』)4例。^{ほんとう}**真成**に(『松のうち』)2例。(『未来之夢』)
 1例。^{まこと}**真成**に(『妹と背かがみ』)1例。
^{けだ} ^{あま ご ぜ めと} ^{けつ} ^{しんせい} ^{あいじやう}
 蓋しルウサアの尼御前を娶つたのは、決して**真正**の愛情から…(『未来之夢』p.695)1例。
^{あ なた} ^{ほんたう} ^{ひと} ^{おも}
 貴女を**真正**にたわいもない人だと思ひかねませんぞ。(『アントニーとクレパトラ』p.38)1例。**真**
正の(『国文学の将来』)1例。(『近世文学思想の源流』)1例。
^{ほんたう} ^{し な じん} ^{しやうじん}
 ありやア**真正**の支那人でせうネ。(『未来之夢』p.587)1例。**真正**の(『發蒙攪眠清治湯講釈』)1例。
^{ほんばん}
正真の(『老圃紙幣の履歴ばなし』)1例。
^{けつこん} ^{ほんたう}
 わたし結婚したでせう。**正実**にしたでせう。(『醒めたる女』p.687)2例。
^{まっとう} ^{ほんたう}
真當に出来るものでない。(『文学入門』明治41年10月、『逍遙全集』11、p.207)1例。**真當**(『賈貨
 つかひ』)1例。

「ほんとう」を表わす語は、「真個(箇)・真正・真成」に各々訓を付けている。「真正・真成」に
 は音読みの場合もある。「真正」の逆の形である「正真」と「正実」の例もあるが、『漢語大詞
 典』に見出しがないし、中国のネットでも見られない。しかし、『大漢和辞典』には「正真」に
 白居易の漢詩が挙げられているし、唐話辞書である『南山考講記』には「正真通得很天」の例
 があることから、口頭語として用いられていたといえよう。「正実」は『論衡』が取上げられ
 ていることから、日本的な漢字表記ではない。「真當」は中国で「當真」(『俗語解』^{チン}當真 ホン
 ホンニ)の逆の形にしたものといえようが、「元・無名氏《貨郎旦》第二摺」(『漢語大詞典』)の

例があることから、やはり中国の口頭語である。このように、坪内は中国の口頭語系統の語を多数用いていたことがわかる。翻訳文学である『じやじや馬馴らし』には、完璧に中国語の会話文になっているものもある。

コン・タトール・イル・コレ・ベン・ソラグトール

真 個 好 邂 逅。(『じやじや馬馴らし』坪内逍遥、大正9年11月、『逍遥全集』4、p.704)

1例。

「本当によくも出会った」という文を中国語に表わした文である。ここに「真個」の例があった。

3.7 その他

今まで見てきた主な語以外にも多数の中国俗語がある。作品ごとの全ての例を提示するのは無理があるので、多用されている作品と思われる『開卷悲憤慨世士傳』を例として、既に考察した語以外の例を1例ずつ示しておくことにする。

『開卷悲憤慨世士傳』

い ひ つ いでたち いでたち ふんさう ひ ご ろ とし こ ろ としごろ ちかごろ ころ
吩咐4例。打扮4例。扮装1例。扮装1例。日比6例。年の比2例。年比13例。近比2例。比
3例。此比2例。真夜中比1例。平生7例。平生1例。平素4例。平常1例。音信れ6例。大人
2例。元来4例。元来7例。素来1例。了解2例。只管27例。容易い3例。顛末1例。一個1例。
いちにん ひ と り い つ こ ひ と り ふ た り ふ た り み た り
一個の2例。一個の(人)33例。一個のN1例。一箇の(人)3例。二個の(人)7例。二個3例。三個
1例。四個1例。六個1例。十個1例。皆是4例。素是7例。又是2例。総て是1例。只是4例。
なほこれ ぼうし かむりもの やうす い す しつぽくだい し し しれもの わるもの
猶是1例。帽子3例。帽子1例。様子24例。椅子5例。小卓子2例。獅子1例。愚漢1例。愚漢
2例。幫閑1例。幫閑2例。可厭1例。可憐2例。可笑3例。可怕2例。油断6例。曩日1例。停立
る1例。光景5例。一団の4例。一同8例。一斉に1例。一向に12例。一向に1例。一斑4例。一齊
に2例。一様なる1例。一様に1例。一定1例。一點の1例。當時16例。當時10例。當時1例。
うろたへ ささやく ひたすら あやにく なう ひつちやう しゆだん こつぜん ひつきやう
狼狽3例。耳語1例。一向に13例。生憎1例。喃15例。必定1例。手段4例。忽然1例。畢竟

2例。畢竟ひつきやうずるに1例。麵包パン2例。麵包ばん2例。宛然さながら2例。狼狽うるたへ3例。狼狽あわつ1例。容貌かほかたち1例。容貌ようぼう11例。容貌みめかたち1例。容貌かほばせ1例。面貌めんぼう1例。衆人もろびと2例。衆人しゆうじん2例。本分ほんぶん4例。目下もくか4例。伶俐れいり1例。加之しゆみけ4例。後來こうらい1例。尋常よのつねの6例。尋常なみなみの1例。尋常じんじやういちやう一様1例。普通ふつうの1例。狼狽らうはいしゆうしやう周章1例。周章しうしやう1例。嘲笑あざわらふ3例。嘲笑あざわらふ2例。冷笑あざわらふ4例。冷笑れいせう1例。権且しばらく1例。約莫およそ2例。同伴どうはん2例。同伴つれ1例。到底たうてい1例。充分じうぶん3例。下物さかな1例。看客かんかく1例。看客みるひと1例。暫時しばし3例。暫時しばらく1例。少焉しばらく1例。豈夫あにそれ1例。必然ひつぜん3例。等閑なほざり1例。談話だんわ1例。便宜びんぎ4例。掌裡しやうり2例。掌裡たなそこ1例。肚裏こころうち6例。肚裏はらのうち4例。心裏しんり1例。冥々裡めいめいり1例。萬一まんいち3例。恍忙くわうぼう1例。故意わざと2例。故意ことさらに1例。故意こい1例。方今ほうこん2例。約莫およそ3例。就中なかにも1例。喝采かつさい14例。結果けつぐわ1例。嚮導きやうだう1例。嚮導みちしるべ1例。顛末もとすゑ1例。理由りゆう1例。邂逅かいこう1例。景狀ありさま3例。情狀ありさま1例。遮莫しやくばく8例。停立たいたずみ1例。停立ていりつ1例。暫且しばらく1例。早晚さうばん2例。等閑視とうかんし1例。話柄わへい1例。方便すべ1例。準備じゆんぷ4例。時分じぶん3例。方今ほうこん2例。了解れうかい1例。理由りゆう1例。情況じやうきやう1例。仔細しさい2例。事由じゆう1例。拿出とりいだす1例。悉皆しつかい1例。向後かうご1例。外套ぐわいやう1例。慌忙くわうぼう1例。四隣あたり1例。四顧あたり3例。正まさに是4例。霎時しばし5例。商議だんがふ6例。快々たくとく4例。听きき1例。道途かどいで1例。方纔いまがた4例。打欣うちよろこぶ2例。打喜うちよろこぶ1例。打棄うちすて2例。打棄置うちすておく2例。打笑うちあむ8例。打聞うちきく1例。打眺うちながめる3例。「打」関連用例は多数であるので省略。

一つの作品に多くの俗語が用いられている。接頭辞「打～」の場合は、「打」がなくても意味上変りがないものが多い。「打～・可～・子～裏(裡)・～漢」のようなものは実に多様であるので以下では除き、今までで取上げていない例を1例ずつ提示して締めくくりたい。

老实まじめ(『発蒙攪眠清治湯講釈』)1例。委細くはしい(『発蒙攪眠清治湯講釈』)1例。有理もつとも(『発蒙攪眠清治湯講釈』)1例。吃驚びつくり(『桐一葉』)2例。標致きりやう(『桐一葉』)2例。四下あたり(『桐一葉』)4例。狼煙のろし(『桐一葉』)3例。只管ひたすら(『桐一葉』)2例。生得せいとく(『桐一葉』)3例。分疏いひわけ(『役の行者』)1例。由縁ゆかり(『役者と女魔』)1例。胡乱うろん(『牧の方』)1例。四辺あたり(『改作牧の方』)3例。不要いらん(『義時の最期』)2例。幸甚しんしん(『新曲浦島』)1例。踉蹌よろめき(『新曲浦島』)1例。許多こゝろ(『長生新浦島』)1例。下物さかな(『新曲赫映姫』)1例。縁故えにし(『新曲赫映姫』)1例。科介こなし(『新曲赫映姫』)1例。夥多あまた(『初夢』)1例。安排あんぱい(『小袖物狂』)1例。料簡りょうかん(『小袖物狂』)

1例。自由自在(「謡曲文は歌なりや文なりや」)1例。必定。^{きつと}(『真夏の夜の夢』)5例。一味。^{ぐる}(『真夏の夜の夢』)2例。一同。^{みんな}(『真夏の夜の夢』)6例。接吻。^{せつぶん}(『真夏の夜の夢』)3例。仔細。^{わ け}(『真夏の夜の夢』)1例。
 些少。^{ちよつぽり}(『真夏の夜の夢』)1例。一驚を喫せざる。^{きやう きつ}(『ヘンリー四世』)1例。一驚を吃せしめん(『馬骨人言』)1例。光景。^{ぶん}(『ヘンリー四世』)1例。十二分。^{たつぶり}(『ヘンリー四世』)5例。十分。^{たつぶり}(『ヘンリー四世』)2例。
 喝采。^{かつさい}(『ヘンリー四世』)2例。向後。^{かうご}(『ヘンリー四世』)1例。歓待。^{もてなし}(『じやじや馬馴らし』)3例。點心。^{パンケツト}(『アントニーとクレパトラ』)1例。做す。^{たより}(『マクベス』)1例。消息。^{たより}(『アントニーとクレパトラ』)2例。
 動靜。^{どうせい}(『アントニーとクレパトラ』)1例。主意。^{しゆ い}(『アントニーとクレパトラ』)1例。辯疏。^{いひわけ}(『アントニーとクレパトラ』)3例。當分。^{たうぶん}(『アントニーとクレパトラ』)1例。踉蹌。^{ぐるぐる}(『アントニーとクレパトラ』)1例。本事。^{て な み}(『アントニーとクレパトラ』)1例。本来。^{ほんらい}(『以尺報尺』)1例。小心。^{しんしん}(『以尺報尺』)1例。爾來。^{て な み}(『以尺報尺』)1例。點頭。^{うなづ}(『マクベス』)1例。抵當。^{ていたう}(『醒めたる女』)1例。幫助。^{きうけつ}(「ウァーツワースの抒情詩」)1例。造化。^{しあはせ}(『賈貨つかひ』)1例。本分。^{つと め}(『ふたごころ』)1例。熱鬧。^{わつたう}(『未來之夢』)1例。久闊。^{きうくわつ}(『未來之夢』)1例。喫驚。^{びつくり}(『未來之夢』)1例。月給。^{げつきふ}(『細君』)2例。地方。^{ち はう}(『京わらんべ』)2例。時候。^{じ こう}(『京わらんべ』)2例。過般。^{くわはん}(『京わらんべ』)1例。下澣。^{すゑのかた}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。輓近。^{ばんきん}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。畢竟。^{ひつきやう}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。一驚。^{びつくり}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。活計。^{くらし}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。生計。^{くらし}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。當今。^{いま}(『一読三歎當世書生氣質』)2例。生來。^{せいらい}(『一読三歎當世書生氣質』)4例。方今。^{はうこん}(『一読三歎當世書生氣質』)2例。太白。^{たいはく}(『一読三歎當世書生氣質』)1例。首途。^{か ど で}(『妹と背かがみ』)1例。俸給。^{ほうきふ}(『老圓紙幣の履歴ばなし』)1例。商量。^{さうだん}(『政界叢話』)1例。苟且。^{かりそめ}(『所謂新しい女』)1例。佇立む。^{ただ ず}(『文界名所底知らずの湖』)1例。東西。^{も の}(『春風情話』)2例。半晌。^{はんとき}(『春風情話』)2例。適纔。^{いまがた}(『春風情話』)1例。方僅。^{い ま}(『春風情話』)1例。上澣。^{はじめつた}(『春風情話』)1例。造化。^{しあはせ}(『春風情話』)1例。一条の。^{いちぢやう}(『春風情話』)1例。勸解る。^{うちわぶ}(『春風情話』)1例。緣故。^{ゆゑよし}(『春風情話』)1例。只得。^{ぜ ひ}(『春風情話』)1例。
 第一套 紅淚落^{ホス} ヲ襟古堡夕^{ヲ ノコベ} 白刃閃^{ひげ} ヲ空葬場嘆^{ニ ノアサ}(『春風情話』)
 第一回 陰霾埋^{インバイウメテ} ヲ地豺狼吼^{ホヘ} ヲ路^{ミチニ} 愁雲掩^{シウウンオホウテ} ヲ天杜鵑叫^{ヲト ケンギョウ} ヲ雨^{アメニ}(『泰西活劇春窓綺話』別冊2)

最後に挙げた例は、中国俗文学に現われている「章回小説」の特徴である。漢詩文スタイルの二行の「回目」である。つまり、その「回」の題目のことで、展開される話の内容を圧縮したものである。これは、近世や近代文学にも少々受け入れられている²²⁾が、坪内も自分の作品に応用している。以上のように、坪内は様々な中国語を受け入れて自分の作品を飾っている。尾崎紅葉も同様であったが、漢語としての音読みはあまりなく、殆んどが訓読みをしている。訓読みをしていることは、それだけ難しい漢字表記であったと認識していたことを意味していると思われる。それで、普通の人には難しいと思われる中国俗語をできるだけ和訓の状態で読ませたのである。自分の作品に中国俗語を用いていることは、文の装飾もあろうが、やはり自分の知識を漢字表記で発露させる作用でもあった。その基底には、唐話学という素養が身につけていたことがあったのであろう。このような中国俗語の漢字表記主義は、既に明治時代に知識人の間にあったわけである。

4. おわりに

本稿では、坪内逍遙の作品を通して中国俗語の実態を把握してみた。近代は英学の時代ではあったが、依然として唐話学の影響下にあった。それは、逍遙が自分の作品に書き残した中国俗文学の書名からも窺われる。また、逍遙は近世の読本の大家である曲亭馬琴の『八犬傳』のようなものも大好きであったことが分かった。こういう環境にあったためか、逍遙の作品には種々の中国俗語が見られる。

まず、指示・疑問代名詞の使用は少ないけれども、「這～・那～」系統の語や「恁麼・什麼・甚麼」の例があった。「這～・那～」系統の語は、「這里・那里」の「里」のように後項は色々あるが、逍遙の作品にはそれほど多くはない。人称・呼称の場合は「阿母」のように「阿～」系の語が多用されているが、全般的に色々な語が受容されている。「閑話休題・却説」のような話題転換語は様々であり、かなり難解の語が見られる。「急地」のような構造助詞、「看一看」のような動詞重ね型は比較的によく多用されている。一部始終の「有枝有葉」はかなり珍しい例であり、「一伍一什」も多数用いられている。また、比況を表わす「～と一般」や「本当」を表わす「真個・真成」などの語も比較的によく見られる。これ以外にも実に多くの中国俗語が作品

22) 羅工洙(2010.08)「近世・近代における中国俗文学的形式の受容」『日本研究』第14輯、高麗大学校日本研究センター、pp.153-180

の随所に見られ、坪内は中国俗語をかなり好んで用いていたことがわかった。

作家により中国俗語の好みは異なるが、坪内は尾崎紅葉と同様、俗語を多用している。これは、中国俗文学で用いられている語への坪内の関心が根底にあったと思われる。勿論、伝統的に用いられてきた漢字表記をしても良いはずであるが、わざわざ一般読者には難解な語を用いていた。しかし、逍遙自身が「ルビが無かったらどうしても読めないのがある」と批判しているようにルビなしでは読めないこともあるため、中国俗語をはじめ少々難しいと思われる漢字には大部分親切にルビを付けている。勿論読者にとって分かりやすくするためのものでもあろう。中国俗語を使用することは、当時の作家達には一面では流行のように認識されていたのかも知れないが、別の視点からみると、中国語の実力を発揮しているという面もあったと思われる。つまり、自分の作品に用いられている中国俗語は、文の飾りの役割もある反面、学術的な要素としての役割もあったのである。

【参考文献】

- 岡田袈裟男(2006)「白話翻訳小説と人を表わすことば—江戸「通俗物」白話小説の人称語彙」『江戸異言語接触』(笠間書院)所収、pp.336-353
- (2006)「江戸の翻訳文体と人称の表現—唐話によって江戸の表現機構を見つめる—」『江戸の翻訳空間』(笠間書院)所収、pp.39-52
- 平凡社の日本人名大事典(1990)、pp.316-317
- 香坂順一(1983)『白話語彙の研究』光生館、p.310
- 徳田武(1987)「読本と近代小説」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、p.804
- 鈴木丹士郎(1987)「読本の漢字」『漢字講座7 近世の漢字とことば』明治書院、pp.235-237
- 羅工洙(2000.09)『泰西活劇春窓綺話』における中国俗語的漢語表現」『日本語文学』第9輯、韓国日本語文学会、pp.29-51
- (2002.05)「近代における中国俗語の受容—『真個』を例として—」『日語日文学研究』第41輯、韓国日語日文学会、pp.99-121
- (2002.06)「近世・近代における中国俗語『動詞重ね型』の受容」『日本学報』第51輯、韓国日本学会、pp.27-46
- (2005.05)「馬琴作読本における中国俗語的話題轉換語」『日語日文学研究』韓国日語日文学会、pp.97-120
- (2005.09)「近代における唐話学の残影」『日本語学研究』第13輯、韓国日本語学会、pp.43-63
- (2008.12)「近世・近代における話題轉換語の諸相」『東北亜文化研究』第17輯、東北亜細亜文化学会、pp.357-382
- (2010.08)「近世・近代における中国俗文学的形式の受容」『日本研究』第14輯、高麗大学校日本研究センター
- (2013.03)「近世・近代における複数を表わす中国語「～們」について」『日本語文学』第56輯、韓国日本語文学会

- _____(2013.06)「近世・近代における比況を表わす『〜と一般』について」『日本語文学』第57輯、韓国日本語文学会、pp.41-74
- _____(2013.06)「近世・近代における中国俗語『一五一十・一伍一什』」『国語学研究』第43集、東北大学国語学研究刊行会、pp.25-35
- _____(2016.02)「近世・近代に於ける「所天・良人」について」『日本近代学研究』第51輯、韓国日本近代学会
- _____(2016.08)「近世・近代における中国語の「~哥・~姐」の受容と展開」『日本近代学研究』第53輯、韓国日本近代学会
- _____(2018.12)「近世・近代における中国語の人称代名詞「儂(咱)・渠」の受容と展開」『比較日本学』第44輯、漢陽大学校国際比較研究所、pp.139-162
- _____(2019.09)「尾崎紅葉の中国俗語趣味」『東北亜文化研究』第60集、東北アジア文化学会、pp.235-259

논문투고일 : 2020년 06월 15일
 심사개시일 : 2020년 07월 15일
 1차 수정일 : 2020년 08월 05일
 2차 수정일 : 2020년 08월 14일
 게재확정일 : 2020년 08월 20일

坪内逍遙の中国俗語趣味

羅工洙

本稿では、坪内逍遙の作品を通して中国俗語の実態を把握してみた。逍遙の作品には種々の中国俗語が見られる。

まず、指示・疑問代名詞の使用は少ないけれども、「這へ・那へ」系統の語や「恁麼・什麼・甚麼」の例があった。「這へ・那へ」系統の語は、「這里・那里」の「里」のように後項は色々あるが、逍遙の作品にはそれほど多くはない。人称・呼称の場合は「阿母」のように「阿へ」系の語が多用されているが、全般的に色々の語が受容されている。「閑話休題・却説」のような話題転換語は様々であり、かなり難解の語があるが、逍遙の初期作品に集中している。「急地」のような構造助詞、「看一看」のような動詞重ね型は比較的によく用いられている。一部始終の「有枝有葉」はかなり珍しい例であり、「一伍一什」も多数用いられている。また、比況を表わす「へと一般」や「本当」を表わす「真個・真成」などの語も比較的に多く見られる。これ以外にも実に多くの中国俗語が作品の随所に見られ、坪内は中国俗語をかなり好んで用いていたことがわかった。

作家により中国俗語の好みは異なるが、坪内は尾崎紅葉と同様、俗語を多用している。これは、中国俗文学で用いられている語への坪内の関心が根底にあったと思われる。中国俗語を使用することは、当時の作家達には一面では流行のように認識されていたのかも知れないが、別の視点からみると、中国語の実力を発揮しているという面もあったと思われる。つまり、自分の作品に用いられている中国俗語は、文の飾りの役割もある反面、学術的な要素としての役割もあったのである。

Chinese slang hobbies of Tsubouchi Syoyo

Na, Gong-Su

In this article, I tried to understand the actual state of Chinese slang through the works of Shoyo Tsubouchi.

First of all, although there are few uses of pronouns and interrogative pronouns, there were examples of words in the system of “這へ・那へ” and “恁麼・什麼・甚麼”. In the case of a person or a name, the word “阿へ” is often used like “阿母”, but various words are generally accepted. There are various topic-switching words such as “閑話休題・却説”, and although there are some difficult words, they are concentrated in the early works of Shoyo. Structural particles, such as “急地”, Verb-overlap styles such as “看一看” are relatively frequently used. The “有枝有葉”, which is part of the story, is a very rare example, a lot of “一伍一什” are also used. In addition, representing the sneak “へと一般” and a relatively large number of words such as “真個・真成” that represent “本当” are also found. Besides this, many Chinese slang words can be found everywhere in the work.

Although the taste of Chinese slang varies depending on the writer, Tsubouchi uses slang as much as Koyo Ozaki. China slang that is used in their work, while there is also the role of the decoration of the statement, is there was a role as pedantic element.